

令和8年度狛江市市民提案型市民協働事業 実施報告書

事業名:要約筆記啓発事業

団体名:狛江要約筆記サークルこまくさ

1 事業の概要

聴覚障害への理解を深め、文字による情報保障である要約筆記の役割や必要性を広く市民に知っていただくことを目的として、要約筆記啓発事業「#文字で伝える やってみませんか」を令和8年8月1日(土)10時から12時まで2時間、あいとぴあセンター講座室にて実施した。

本事業では、聞こえない人・聞こえにくい人が日常生活や社会参加の中で直面する情報取得の困難さについて理解を深めるとともに、要約筆記を見て、筆談ボードを作って、筆談や手書き要約筆記を体験してもらい、要約筆記の必要性を実感できる内容とした。

当日は17名(子ども6名・大人11名)の市民が参加した。

参加者からは、「要約筆記について初めて知った」「これまで手話通訳は知っていたが文字による情報保障については知らなかった」などの声があり、実際に見て、作って、体験することを通じて要約筆記への理解を深める機会となった。

実施内容は以下のとおりである。

(1) 要約筆記について

聞こえない人・聞こえにくい人に音声情報を伝える手段の1つである要約筆記について、その役割や必要性、方法(手書き・パソコン)について説明した。

(2) 当事者のお話

聞こえにくさによる生活上の困難や、文字による情報保障がもたらす安心感について、当事者から直接話を聞く機会を設けた。

(3) 遠隔文字通訳(パソコン要約筆記)の紹介

captiOnlineを活用した遠隔による情報保障を紹介し、会場にいない要約筆記者が文字情報を届ける仕組みについて説明した。

(4) 筆談ボードづくりワークショップ

参加者自身が携帯して使用できる筆談ボードを作成した。

(5) 文字による情報保障の体験

作成した筆談ボードを使用した筆談体験と、OHC(手書き要約筆記)体験を行った。文字で情報を伝える体験と、イヤーマフ等を使用して聞こえにくい状況で文字による情報を受け取る体験を通して、文字による情報保障の工夫やその必要性を実感していただいた。

2 市との役割分担

項目	実施主体	役割
事業費	市	事業費の負担(市の予算の範囲内)
	こまくさ	事業費の執行及び管理
事業の実施	市	(1)会場の確保 (2)体験講座及びワークショップの運営支援 (3)庁内の調整
	こまくさ	(1)事業の企画 (2)参加の応募受付 (3)体験講座講師の手配 (4)体験講座及びワークショップの運営
事業の周知	市	(1)学校、学童クラブその他事業に係る公共施設における周知 (2)広報こまえ、市のSNS等への掲載
	こまくさ	(1)周知チラシ等の作成 (2)市が周知する対象以外の周知
事業実施後	市	(1)事業報告書の作成支援 (2)事業費の執行結果の確認 (3)負担金の精算
	こまくさ	(1)参加者アンケートのまとめ (2)事業報告書の作成 (3)執行結果の分かる収支表の作成及び事業費の支出を確認できる領収書の写しの提出 (4)負担金の精算

3 事業の成果

参加者アンケートでは、要約筆記の説明について「とても深まった」13 名、「少し深まった」2 名となり、回答者 15 名全員が要約筆記について理解が深まったと回答した。

当事者の話については、「聞こえないことによる孤立感や、文字で情報が得られる安心感について理解できた」「聴覚障害者が必ずしも手話を使えるわけではなく、文字による情報保障が必要な方がいることが分かった」といった感想があった。

筆談ボードづくりについては、「とてもよかった」11 名、「よかった」4 名で、回答者 15 名全員から肯定的な評価を得た。完成した筆談ボードを使って会話やしりとりを楽しむ姿も見られ、特に子どもたちは楽しみながら筆談によるコミュニケーションを体験していた。

手書き要約筆記(OHC)体験では、「とても興味を持った」10名、「興味を持った」5名となり、回答者15名全員が手書き要約筆記に興味を持ったと回答した。実際にOHCで書く体験を通じて、文字が情報として届く仕組みを知るきっかけにもなった。

パソコン要約筆記については、「内容を理解できた」9名、「技術や仕組みに興味を持った」8名となり、複数回答であるため単純な人数の合計ではないが、内容の理解だけでなく、技術や仕組みに関心を持った参加者も多かった。また、終了後にも入力方法や活動について質問する参加者が見られた。

遠隔による文字通訳(要約筆記)についても、その仕組みを知り、情報保障の可能性を感じたという意見があり、遠隔による情報保障について知っていただく機会となった。

スタッフからの振り返りでは、参加者が積極的に体験に取り組んでいたこと、子どもから大人まで交流を楽しんでいたことが報告された。説明を聞くだけでなく、自分で書いたり、聞こえにくい状況を体験したりすることで、情報保障について身近に考えてもらえたことが今回の事業の成果であると考えている。

要約筆記を利用する当事者を対象にアンケートを実施し、手書き要約筆記とパソコン要約筆記それぞれに適した場面や、音声認識による文字化との違い、要約筆記を利用する際に重視する点などについて6名から意見を得た。

アンケート回答内容には、手書き要約筆記は医療場面や一对一の場面など、相手とのやり取りが必要な場面に向いていること、パソコン要約筆記は講演会や大人数の集まりなどに適していることなど、利用する場面に応じた情報保障が必要との意見があった。

また、音声認識については、誤変換や、話された内容がそのまま表示されることによる情報量の多さから、読むことへの負担が生じる場合があるとの意見があった。このことから、単に音声を文字にするだけでなく、利用する人や場面に合わせて、分かりやすく伝えることも要約筆記の大切な役割であることを改めて確認した。

今回の事業を通して、市民に要約筆記という存在を知っていただくだけでなく、それが単に音声を文字化するものではなく、利用する方の状況や場面に応じて、必要な情報を分かりやすく届ける情報保障であることへの理解を深めていただくことができた。また、当事者から具体的な意見を聞くことで、今後の要約筆記や情報保障のあり方を検討するための材料を得ることができた。

4 今後の展開や見通し

本事業では、要約筆記について「初めて知った」「手話以外にも情報保障の方法があることを知った」という方に多く参加していただけた。子どもの参加もあり、体験を通じて要約筆記を知ってもらえる機会となった。家庭に戻ってから、家族や友人に「要約筆記」という情報保障の方法を伝えることも啓発となると考える。要約筆記を必要としていても、障害者手帳を持っていない人、制度を知らない人もいる。そのような人にも、つ

ながることを期待したい。そして、要約筆記を必要とする人への支援へとつなげたい。

当事者アンケートからは、音声認識は誤変換・情報量が多いという意見や、手元で読み返すことができるといい、手書きは汎用性が高いなどという意見があった。これらより、利用者によって、読みやすさや必要な情報量が異なることを考える必要があることがわかった。高齢者や幼児なども含めた利用者と利用する場面に合わせる、つまり寄り添う要約筆記を目指したい。

その選択肢としては、遠隔文字通訳で使用する captiOnline システムの利用も考えられる。手元のデバイスで利用可能であり、さらにその場で読み返す等の機能もあるのでそれらを活用できればいい。

また遠隔文字通訳の可能性として、災害時など、現地の支援を受けることが困難な場合でも情報保障を提供できる方法の一つとして考えられる。市における遠隔文字通訳の活用についても、今後の検討をお願いしたい。

今後は、市民への啓発を継続するとともに、要約筆記それぞれの特性を生かした方法について市民や市に伝えていきたい。そして、利用する人の状況や場面に応じて、必要な情報を分かりやすく届けることを大切にしながら、要約筆記の認知度を高めていきたい。また、支援を必要とする人が、支援につながるきっかけを増やしていきたい。

5 添付資料

(1) 収支決算書

別紙

(2) 事業の実施状況の分かる資料(チラシや当日の写真など)



要約筆記啓発事業「#文字で伝える やってみませんか」参加者アンケート集計結果

参加者数:17 名

アンケート回答者数:15 名

【本日の内容について】

1. 本日の要約筆記の説明を聞いて、理解が深まりましたか。

回答	人数	割合
とても深まった	13 名	86.7%
少し深まった	2 名	13.3%
あまり変わらなかった	0 名	0%
わからない	0 名	0%
合計	15 名	100%

2. 当事者のお話を聞いて、印象に残ったことや感じたこと。

- ・聴覚障害者が日常生活で感じている不便や、周囲とのコミュニケーションの難しさについて理解が深まった。
- ・「文字を見ることで安心する」という当事者の話が印象に残った。
- ・聴覚障害者が皆、手話を得意としているわけではないことを知り、要約筆記の必要性を感じた。
- ・要約筆記がもっと広まってほしい。

3. 筆談ボードづくり・筆談体験について

回答	人数	割合
とてもよかった	11 名	73.3%
よかった	4 名	26.7%
普通	0 名	0%
あまりよくなかった	0 名	0%
合計	15 名	100%

4. 体験を通して感じたことや気づいたこと

- ・筆談ボードを持ち歩くことで、聞こえない・聞こえにくい人とのコミュニケーションに役立つと感じた。
- ・災害時など、電気が使えない状況でも活用できると感じた。
- ・自分で筆談ボードを作ることが楽しかった、オリジナルのものを作れることが印象に残った。
- ・イヤーマフを使用することで、聞こえにくさを実感した。

5. 手書き要約筆記(OHC)体験について

回答	人数	割合
とても興味を持った	10 名	66.7%
興味を持った	5 名	33.3%
あまり興味を持てなかった	0 名	0%
よくわからなかった	0 名	0%
合計	15 名	100%

【パソコン文字通訳(要約筆記)について】

1. パソコン文字通訳について

回答 ※複数回答	人数
内容を理解できた	9 名
技術や仕組みに興味を持った	8 名
自分も学んでみたいと思った	2 名
もう少し詳しく知りたいと思った	2 名
特に興味はなかった	0 名

2. パソコン文字通訳(要約筆記)を見て、印象に残ったこと。

- ・手話通訳は知っていたが、パソコン文字通訳は初めて知った。
- ・入力の速さや、話している内容を文字にする技術に驚いた。
- ・遠隔による文字通訳の仕組みを知り、情報保障の可能性を感じた。
- ・手話通訳以外にも、さまざまな情報保障の方法があることを知る機会となった。
- ・AI や音声認識技術が進歩する中で、人が文字通訳を行うことの意味について考えるきっかけとなった。

3. パソコン文字通訳活動への関心

回答	人数	割合
とても関心を持った	9 名	60.0%
少し関心を持った	5 名	33.3%
あまり変わらなかった	1 名	6.7%
関心を持てなかった	0 名	0%
合計	15 名	100%

4. パソコン文字通訳講習会について

回答	人数	割合
参加を検討したい	3 名	20.0%
開催時期や内容を知りたい	0 名	0%
興味はあるが、今は参加予定はない	9 名	60.0%
今回は参加を考えていない	1 名	6.7%
未回答等	2 名	13.3%
合計	15 名	100%

5. 講習会や要約筆記活動について知りたいこと(自由記入)

- ・手書き要約筆記を体験・学習してみたい。
- ・パソコン操作が苦手でも参加できる活動があるのか知りたいという意見があった。
- ・講習会の開催日時や内容について、より詳しく知りたい。
- ・仕事をしている人も参加しやすい開催日時を望む。
- ・東京都の講座と市の講座の違いを知りたい。

【全体について】

1. 今回のイベント

回答	人数	割合
とてもよかった	12 名	80.0%
よかった	3 名	20.0%
普通	0 名	0%
あまりよくなかった	0 名	0%
合計	15 名	100%

理由(自由記入)

- ・「たのしかった」「楽しみながら、要約筆記のことを知ることができた」など、楽しみながら学ぶことができたという意見があった。
- ・要約筆記についてより深く知ることができた、知らなかった体験ができて勉強になった。
- ・筆談ボードづくりについて、全ての世代が楽しめる内容だった。
- ・子どもの自由研究にも役立ちそうという意見があった。
- ・全体の構成がよく、子ども連れでも楽しめる内容だったという評価があった。
- ・前半のスタッフや当事者の話をさらに詳しく聞きたかったという意見もあった。

2. 特に印象に残った内容

- ・「OHC が面白かった」「OHC が思ったよりも大きく書かないと見にくいことなど面白かった」など、手書き要約筆記(OHC)の体験が印象に残ったという意見があった。
- ・筆談ボードを作ったことや、実際にボードを使って会話したことが印象に残った。
- ・要約筆記の必要性が印象に残った。
- ・生まれつき難聴の当事者の経験談や、「手話が分かる人が少ない」という話が興味深かった。
- ・「手話通訳よりも要約筆記の文字通訳のほうが安心して情報を得ることができる」という意見があり、当事者の話を通して情報保障の必要性を実感したことがうかがえた。
- ・「全部」と回答した参加者もあり、イベント全体を通して印象に残ったという意見があった。
- ・「スクリーンの情報保障が速くて読めなかった」という意見もあり、文字情報の表示速度や見やすさについては、今後の改善点として検討する必要がある。

3. 今後、要約筆記や聴覚障害への理解を広げるために必要だと思うこと

- ・今後もこのような啓発イベントを継続してほしい。
- ・要約筆記を具体的に知ってもらう機会をさらに広げる必要がある。
- ・講演会等に要約筆記を付けることを広げてほしい。

4. 参加者の年代

年代	人数
小学生	3 名
10代(中学生・高校生など)	0 名
20代	0 名
30代	2 名
40代	4 名
50代	2 名
60代	0 名
70代以上	4 名
合計	15 名 ※参加者 17 名のうち、年代について回答した 15 名を集計。参加者数には幼児を含む。

集計結果から見える成果

- ・回答者 15 名全員が、要約筆記の説明について「理解が深まった」と回答した。
- ・筆談ボード体験、OHC 体験についても全員が肯定的な評価をした。
- ・パソコン文字通訳についても、多くの参加者が関心を持ち、遠隔による情報保障等の方法を知る機会にもなった。
- ・小学生から 70 代以上まで幅広い年代が参加し、体験型の内容を通して、世代を超えて要約筆記や聴覚障害について知る機会となった。

要約筆記啓発事業「#文字で伝える やってみませんか」当事者アンケート結果
回答者数:6名

1. これまで要約筆記を利用したことがありますか

回答	人数
よく利用している	2名
時々利用している	0名
利用したことがある	1名
利用したことはない	0名
未回答	3名
合計	6名

2. 要約筆記があるとよい場面について

回答者によって必要とする場面には違いがあったが、講演会・講座、会議・話し合い、病院・医療機関、学習会、スマホや機器の操作説明、少人数での相談や会話のすべての項目について、要約筆記があるとよいとの回答があった。

3. 手書き要約筆記が向いていると思う場面について

- ・1対1から少人数での場面
- ・難しい用語が出てくる場面
- ・医療現場や診察時
- ・ノートテイク
- ・個人的な内容を扱う場面
- ・遊びや友人と会うなど、日常的な場面

4. 手書き要約筆記に期待すること、よいと思う点

- ・インターネット環境がなくても利用できる。
- ・相手とやり取りをしながら、質問したり尋ねたりすることができる。

5. パソコン要約筆記が向いている場面について

- ・講演会、講習会など、多数の人が集まる場面
- ・大きなイベントや集会
- ・高齢者が多く参加する場面
- ・1対1以外の、多人数での場面全般

6. パソコン要約筆記に期待すること、よいと思う点

- ・話している内容をできるだけそのまま表示してほしい。（「あー」「うー」等は不要）
- ・通信が途切れることがあり、不安を感じることもあるため、安定した運用を望む。
- ・言葉を習得する前に聞こえなくなった人など、言葉や単語の意味を理解することに難しさを感じる場合があり、その点にも配慮した情報保障が必要。

7. 要約筆記を利用するときに大切だと思うこと。

- ・分かりやすい表示、正確さ、速さ
- ・速く表示されることも重要だが、ミスを少なくすることが必要
- ・病院では情報保障に時間が必要となるため、要約筆記を依頼することを申し訳なく感じることがある

8. 音声認識と要約筆記について

- ・音声認識は、話し手の内容を理解する前に表示が速く進むと、読む側が追いつけないことがある。
- ・現在は誤変換も多いため、人による確認や修正でカバーすることを期待する。
- ・記録を残し、後から再確認できることを期待する。
- ・音声認識技術が将来的に発達しても、難聴者との意思疎通や深いコミュニケーションを支える要約筆記者の役割は重要である。
- ・市役所などの公的な場所に要約筆記者がいると助かる。

9. 要約筆記について、聞こえる人に知ってほしいことや伝えたいこと

- ・聞こえにくく、手話のできる人でも勘違いは起こる。書けばほとんど OK

当事者アンケートから見えること

- ・手書き要約筆記については、少人数での場面に適しているとの意見があり、インターネット環境がなくても利用できることや、相手とやり取りしながら情報を確認できることが利点として挙げられた。
- ・パソコン要約筆記については、多人数が参加する場面に適しているとの意見があった。
- ・要約筆記を利用する際には、表示の分かりやすさ、正確さ、速さのバランスが重要であり、利用者が読み取りやすい情報保障が求められていることが分かった。
- ・音声認識技術が普及する中でも、誤変換の修正や表示速度への配慮、利用者とのコミュニケーションなど、人による要約筆記への期待が寄せられた。
- ・市役所などの公的な場所等、さまざまな場面で要約筆記が利用できることへの期待もあり、日常生活や社会参加における情報保障の必要性和ニーズが示された。